

## 自著を語る

Shibata, Masako (2005)  
*Japan and Germany under the U.S. Occupation: A  
Comparative Analysis of the Post-War Education Reform.*  
Lanham, MD: Lexington Books.

本書は、第二次世界大戦後、アメリカ合衆国の軍事占領下におかれた日本(1945-1952)とドイツ(米ゾーン)(1945-1949)における教育の構築・再構築の過程を考証するものである。両国の戦後占領教育改革におけるアメリカ軍政府の果たした役割に関しては、当該国を中心に多くの先行研究がなされているが、本研究は、3カ国の現地資料の解釈を通して、2つの占領教育改革を、両国の近代国家形成過程における社会史という比較的長い歴史的な文脈に投影させながら包括的に比較分析するという、従来の研究には少なかった視点と視野で取り組んでいる。

軍事占領下でありながら広範囲で抜本的な改革の迅速な改革が断行された日本の場合と、ナチス期以前の伝統的制度の保持と主権回復後のドイツ人による漸進的改革という米ゾーン・ドイツにおける教育改革の対照は際立ち、このことは、「アメリカ人の人種差別」論や「日本人の西洋モデル直進進化論」説はもとより、各改革の非常に限られた側面からの考察では論じられない、と著者は考えた。元占領官も口々に回想する - 「日本人は外国で生まれ育ち発展してきた価値を、一体どうしたらそれほど容易に受け入れることができたのだろうか？」 占領軍が予想していた以上に改革が進んだことに、当惑したアメリカ人占領官は少なくない。日本人のこの「不可解な反応」についての問が本研究の始まりであった。

占領そのものの統治形態等の相違は、もとより重要な要因である。本書でも、占領期の極東とヨーロッパにおける、アメリカと他の連合諸国間に顕在した補償・復興に関する問題や、冷戦表面化のタイミング・緊張度の違いといった政治・経済的側面に着目した。連合諸国の利害が複雑に絡み合うドイツ占領では、教育改革の政治的 중요度は日本占領に比し極めて低かった。また、自国の教育制度発展に関しドイツから大きな影響を受けてきたアメリカが、「西洋文明から数世紀も立ち遅れる極東の小国」日本に対しては、ドイツより抜本的な改革の必要性を強く認識していたという文化的

側面についても分析を加えている。しかし、本書がとりわけ重要視したのは、被占領国側の米改革案への対応である。ドイツでは米軍政府とドイツ人行政官や教育者らとの絶え間ない軋轢の中で改革は挫折し、日本では改革案の受容に止まらず教育者らの積極的協力を得た。本書では、両国の近代国家形成過程における教養市民層の形成のパターンに注目した。すなわち、2つの社会の階層構造・宗教・政治制度・教育に関する、ドイツにおける長い、そして日本における比較的短い「モダニティ・プロジェクト」の比較分析を通して理解しようと試みている。

第一部は、教育社会史の視座に立ち、大学におけるエリート養成の理念と実践を、近代国家形成という政治的ダイナミズムの中で生じる社会変動との相互関係において比較分析している。中核を占める第二部は、主な占領教育改革の経緯における、日独両国とアメリカ軍政府との改革交渉について、公文書をもとに検証している。第三部を成す結章では、第一部の分析と第二部の検証に基づき、1つの試論が提示されている。

「前書き」でも述べられているように、本書はさらに比較教育学の3つのテーマを提示している。1つは近年再び生氣が与えられている 'transfer' というテーマである。古くは19世紀パリのジュリアンが比較教育の「実証科学」の成立を目指し、後にオックスフォードのサドラー卿が講じたテーマ「我々はいかにして外国教育制度の研究から実用的な価値を学び得られるか？」日本の場合、「近代国家」「民主主義」の構築に欠くべからざる価値を見出した。2番目は、1970年代の「文化帝国主義としての教育」から現在ではポスト・コロニアリズムと展開されたテーマである。ドイツでは数世紀にわたって教養市民層の間で培われてきた *Bildung* の概念が、アメリカ占領下では強力な文化的抵抗装置として機能した。3つ目のテーマは比較研究における歴史研究の役割、すなわち歴史的な文脈づけの重要性の提示を試みている。よって本書は、日本とドイツの19世紀後半における急速な近代国家形成過程とその一つの結果としての戦争・敗戦・占領改革を考証するという「単独の目的」で読むこともできるが、さらに現代の比較教育におけるこれら3つのテーマを撚り合わせ、その各断片に両占領教育改革の各側面を照射しながら議論をも提供しようと試みている。この歴史と教育の「撚り糸」を読者も楽しめるなら、著者の本望を遂げるものである。

(柴田 政子、筑波大学)